H17 募集要項より 5枚

入学試験について

幼稚舎に子供を入学させたいと思っているが、入学試験を受けるには、どういう準備をしたらいいのだろうか、とよく尋ねられる。以下は、こうした質問に答えるためのものである。

1　はじめに

小学校入学前の子供に、入学試験を課すということは、そのこと自体まことに不自然なことである。しかし、慶應義塾の大学へ繋がる一貫教育の一環をなす学校として、生徒にある程度以上のものを要求しているし、また、現実に募集する人数を数倍上まわる方が入学を希望していることからも、入学者を選抜して決めなければならない結果になっている。

けれども、その選抜の倍率が高くなると、入学試験の存在が、本来あるべき幼児の生活に偏りを生じさせることになり兼ねない。何とかして合格させたい、合格のためには何でもしよう…となると、一部ではあろうが、常識では考えられないような過熱した状態に自分から巻き込まれていくことがあるようである。

こうした親の考えは、幼い子供達の心に取り返しのつかぬ影響を与えることとなる。所謂『問題行動』をおこした場合を見ていると、入学試験の競争率がきびしくなった結果、歪められた幼児期を過ごしたことが、どうもその原因の一端を担っているのではなかろうかと考えさせられることがある。幼児期にまかれた種が、あとになって現われてくる。幼児の受験に当たっては、両親の考えこそ、中心になるので、殊更に慎重であらねばならない。

(1)　三つの面と入試のねらい

幼稚舎の入学試験は、次の三つの面を総合して判定している。

1　幼児の身体的なはたらきと健康の状態をみる。
2　幼児の人柄や生活態度をみる。
3　幼児の頭のはたらきをみる。

これらの試験の具体的な方法は、限られた時間の中で、数多くの幼児を出来るだけ正確に評価するのにふさわしいものであり、かつ、受験する幼児の本来の生活、つまり、家庭や幼稚園の生活を出来るだけ乱さぬものであるようにと常に心がけてきている。

すなわち、何よりも正常な幼児教育を尊重する立場である。入学試験のために何か特別な教育の仕方があるのではなく、本来あるべき幼児教育の充実こそ、入学のために、正に必要不可欠なものであると信じている。従って、幼稚舎の入学試験のねらいは、一般的な幼児教育の場で常々指導されている事柄、つまり、健康や安全な生活に必要な態度、個人の生活あるいは家庭や幼稚園の共同の生活における望ましい態度や習慣、そして日常生活に必要な能力などをみることにある。

こうした態度や能力は、不自然な練習や訓練でその場しのぎに詰め込んで対応出来るものではない。持って生まれた能力と、今日まで両親の養育によってはぐくまれたもの、毎日の生活の積み重ねの中で体得してきたものによって決まってくる。このことは、受験を希望する両親に、何よりも先ず充分に理解してもらいたい事柄である。

(2)　幼稚園時代の大事さ

今更ここに書くまでもないが、幼児期は、その人の一生の基礎づくりである。我々自身、自覚に達する以前の乳児・幼児の時代に、すでに自分にとって基本的なものがかなり形成されるといわれている。「三つ子の魂、百までも」と言われる所以であるが、「自分の子供の頃のことを思い出してみよ」と言われて思い出せるのは、幼稚園の時代までであろう。入園以前の出来事は思い出せなくもないが甚だ断片的である。しかし「自分の通った幼稚園のことを思い出してみよ」と言われると、自分の通った幼稚園の玄関はこういう形だった、教室はこんなふうだった、運動場にはブランコが並んでいた…というふうに、今もありありと映像のように思い出すことが出来る。恐らくこの思い出は、我々が年をとって老人になっても、各々の記憶の中で、いつまでも鮮明に残っていくことであろう。幼稚園の時代は、正に我々の人生にとって自ら意識して溯り得る原点であると言えよう。

この幼稚園の時代に、親は子供にどんなことを与えているのだろうか。

「若し、僕が－私が－ほかの家に生まれていたら、こういうことはさせて貰えなかったかも知れないが、僕の父母は、自分にこういうことをさせてくれた。あの時の嬉しかったこと、今だにあの時の情景をありありと思い出すことが出来る。自分も親になったら、必ずこのことを子供にしてやりたい」というように、今の幼児が二十年三十年の後、親の立場になった時、再び実

行したいと考えるような、内容の充実した経験をさせてみたい。

○

受験するためには、特別な塾へ通って、入試のための訓練を受けなければ合格しないなどと、まことしやかに語られることがあるようである。「Aさんのところでは○○塾へいっているし、B君は××教室へいっているそうだ」ということになると、親は徒らに不安な気持ちになってくる。正に「入学試験を受ける」ということに追い立てられて、どこでもいいから、とにかく、どこかへ入れなければ…などと、子供の発育や興味を二の次にし、幼稚園の友達との楽しい生活まで犠牲にして走り廻る結果となることがあるようだ。「ほら、あなたは、また、これが出来なかったじゃないの、きのう、あんなに教えてあげたのに！」と言うことにもなり兼ねない。

子供達はどう思うのであろうか。「僕の幼稚園時代は大変だった。入学試験を受けるから…と言われて、幼稚園が終わると直ぐ塾へ行かされて、びしびしやられて、その上、一寸出来ないと叱られて…あんな厭だったことはない。僕が親になったら、絶対、こんなことは子供にさせたくない」と感じさせるようなことがなければ幸いである。

○

子育てというものは、本来、親から子へ、子から孫へと、親が心をこめて授けてくれたものを、自分もまた心をこめて子供に伝え渡して、鎖の輪のように繋げられてきたものであるし、これからもそうして繋げられてゆくものである。こうした子育ての本質に逆らって「自分が大人になった時、自分の子供には絶対させたくない」と考えさせるような方法を実行しているとしたら、たとえ入学試験があるのだからと理由づけをしても、親として、子供に対して責任のある育て方をしたとは言えなくなる。

世の中一般に、入学試験の激化が様々な悲劇を生むに至っている。「入学試験に受かりさえすれば…」という狭い考え方が、子供達の人間性をどんなに蝕んでいるか判らない。幼い子供の「受験」を目の前にした時こそ、先ず基本的な考えに立ち返って、子供を一人前の社会人に育てるという、長い、広い視野の中で、親としての在り方を考える機会としたい。

2　何をしたらいいのか

では、具体的に何をしたらいいのか。不自然な入試のための準備ではなく、受験の有る無しに拘わらず、幼稚園の年齢の子供として必要なことを正攻法で狙うことが、幼稚舎の立場である。こうした意味で留意すべき事柄は数多く挙げられようが、今ここでは、以下の四つのことを取り上げてみたい。

(1)　丈夫な体

第一は健康、つまり丈夫な体である。古来、健全な精神は健全な肉体に宿ると言われている通りで今更説明するまでもない。福澤先生の言葉にも「先づ獣身を成して後に人心を養へ」とある。しかも、子供の心にとっては、子供自身の健康とともに、両親の健康もまた大切である。頭痛に悩む母親の渋い顔をいつも見ている子供があるとしたら、その子供はどう感じることであろうか。ごくごく当たり前のことであるが、家族全員の健康が、何よりも先ず大切ということであるが、入学試験が近づいてくると、こうしたごく当たり前のことが二の次にされがちになるので注意を要する。

(2)　かがやくまなこ

第二は、物を見る目を育てること、つまり観察力を養うことである。観察力は、それだけが抽象的に育つものではなく、具体的に物を見る行為を通して養われて行く。そして「物を見る」ことは、自分の身の周りに面白いもの、つまり、興味や関心の対象となるものを持つことによってつくられてくる。

自動車の好きな子供は、歩道で信号を待っている間にも、車道を走っていく自動車をちゃんと見ている。「今、通った車のワイパーは新しい型だ。さっきの車のバックミラーは変わった型だった…」などと、同じ型式の自動車でも、僅かな違いを目敏く見つけることが出来る。物をしっかり見ることは、物を考えることに通じる。「なぜ、ああなっているのだろう」と疑問を持ち、知的な発展への出発点となる。

「電車の絵を描いてごらんなさい」と言われて、電車の絵を描いたとする。「電車の屋根の上は、どうなっているか、知っている？」「さあ、知らない」「では、今度ママと一緒に行って、電車を見て来ましょう」ということになれば、「電車の屋根の上は、こんなふうになっていた。それから、こんなのもあった」ということになる。プラットフォームで待っている時にも、反対

側を走る電車をしっかり観察するようになる。同じ電車の絵でも電車の好きな子供の描く絵は、部分々々の違いを描き分けて、細かく観察したものを表現するようになる。身の回りの世界に、好きな物を持つ子供に育てたい。

一つの物を見た時、今まで知っている物と比べて、どこがどう違うか、その相違を発見しようとする気持で見る。こうした見かたの習慣を育てていきたい。これは、外の人に頼んで出来ることではない。父母が、毎日々々の生活の中で、子供の様子を観察し、好ましい刺激を与えて、興味づけて、如何に知的な好奇心を育てていくか、ということになる。

(3) ことばの生活

第三に、耳と口を育てたい。つまり、子供の生活の言語的な面を考えることである。『百聞は一見に如かず』と言われている通り、見ることの重要さは論をまたないが、聞くこと、すなわち、注意を集中して話を聞き、内容を理解することは、今日の学校の生活で、これまた基本的に重要な事柄の一つである。昔はラジオの「子供の時間」などに耳を傾けたものだが、今の子供達にとってはテレビを通じていつも映像と音声が結びついて目と耳に入って来る。しかも、刺激の強い映像と音声に慣らされているといえよう。幼稚園や学校の生活では、常にことばが映像と一緒に伝えられるわけではない。ことばだけで語られる場合でも、注意を集中して聞くことが、実際の生活でかなり重要である。

こうした面では、本を読んで聞かせることなどが面白いのではなかろうか。我々にとっても子供の頃、母親に物語を読んでもらった時のことなど、懐しい思い出である。近頃の子供は、昔と比べて本を読んで聞かせてもらう機会が少なくなっているのではないかと考えさせられることがある。これもテレビの影響であろうか。子供達は本を読んでもらうことを大変喜ぶものである。静かな雰囲気の中で、しばし、物語の世界へ引き込まれていく。物語の中には強い人もいれば弱い人もいる。威張りたがる子供も泣き虫も出てくる。王子様も乞食の子も登場する。間接的な経験ながら、様々な立場の人物を通じて、心の世界を拡げていくことが出来る。読んでいる親にとっても夢の多い楽しい時間となりえよう。読後のほのかな余韻の中で不粋な質問でもないが、ひと区切り読んだところで、内容をうまく話し合えれば、どの程度理解したのか、どう感じたのか、これからどうなると考えているか、などをつかむことも出来よう。気に入った物語にめぐりあえば、何回も読んでもらっている

内に、自分でその物語を語ることも出来るようになろう。

また、毎日の生活の中でも、人の言うことを最後まできちんと聞くことを通して、自分と違う立場のあることを学ぶことにもなる。ことばを学ぶことは、心を学ぶことに通じることである。

『話す』という面も、生活の中で育っていく。「ママ、お水」とだけ言って水を求めることは、家庭でごく当たり前のことであるが、「お水がどうしたの?」と聞き返せば「喉がかわいたからお水を一杯ちょうだい」というように、より広い場で利用できる、整った表現を学ぶことになる。家族の中で暗黙の諒解の内に通じることばから、他の人にも判ってもらえることばへ——社会的に通用することばへ——育つことが必要である。

○

こうした基本的な能力を育てるという意味で、殊に幼稚園の最後の一年間を過ごす子供達に、ハイキングや簡単な山登りなどが望ましい経験となるのではなかろうかと考える。この年齢になれば、かなりの距離を歩くことが出来る筈である。数時間続けて歩くことは身体的に意味のあることであるが、近頃では大人の世界でもめったにしないことになってきた。小さな山でも頂上まで登って征服したという充実感は、子供に自信をつけることになる。そして、歩いている間、親子の会話が出来る。このことの意味は大きい。

普段は、同じ家にいながら、父と子、あるいは母と子ですら、別々の生活をしている場合が多い。「今、ママは忙しいから、独りで遊んでいて…」などということである。しかし、ハイキングや山登りとなれば、歩き始めてから帰って来るまで、何時間でも一緒にいる。「パパが幼稚園の頃には、こんなことがあったんだよ…この頃、きみの幼稚園はどうかな…」などと、親子の会話を成立させる場が提供されることになる。子供は自分の経験したことを「ことば」にまとめて表現する機会となり、親には子供の生活を知る好機となる。

「ほら、あれを見てごらんなさい。この頃のお百姓さんは、あんな機械を使っている。ママ達が子供の頃にはああいうものは無かったのよ。面白そうだから、見せてもらいましょう」とか、「あれが発電所だ。ああいうところで電気が作られて、おうちにも来るんだよ」あるいは「あっ、あそこにかえるがいる!」というふうに、子供の経験する世界を拡げ、いきいきとした興味の対象を広く求めることが出来る。

夕立のあとで、鮮かな虹を見るかも知れない。夕暮ともなって素晴らしい

夕焼けを見ることもあろう。「ママ、あの時の夕焼けは綺麗だったね、本当にからすが鳴いて飛んでいったね」となれば、その美しい夕焼けの情景は、子供の心にいつまでも忘れられない記憶として残ることであろう。自然の美しさに驚きのまなこを開くことが出来れば、どんなにか心を豊かにすることか。こうしたことは、また同時に、親にとっても素晴らしい思い出となる。子供が成人した時に「あなたが幼稚園の時には、こういう楽しいことがあったわね」と話し合うことが出来る。いわば、親としての人生の喜びの一つとしても、長く残ることとなろう。

(4)　自分でできることは自分で

第四に挙げたいのは、自分で出来ることは自分でするということである。このことは、自分の人生に積極的に参加しようとする、頼母しい心を育てることになる。

家庭によっては朝食の時、牛乳を大人がみな注いでいることであろう。「牛乳ぐらい、少しこぼれても平気よ。でも、なるべく上手にカップに注いでちょうだい」とやらせれば、指先を細かくコントロールし、作業が終わるまで注意を集中して「ママ、出来た！」となる。「うまく注げてえらいわね。ではパパのも注いであげて」こうして、子供は今まで出来なかったことが、自分で出来るようになった充実感を味わうことが出来る。

ジュースの王冠を開けるのに、はじめは大人に下をおさえてもらって、開けてみる。慣れてくれば、自分で瓶をおさえて開けられるようになる。風呂から出た時も、普通の大きさのタオルでは絞れないが、小型のタオルを与えて、はじから巻いていく方法を教えれば、自分でも絞ることが出来る。「どれ、ママにかしてごらんなさい。あら、随分かたく絞れるようになったわね」とほめられれば「あしたはもっと固く絞ってやろう」と考えるようになる。人生に立ち向かう、積極的な心を養うことになる。襟のボタン、カフスのボタンも、大きさを考えて選んでつければ、段々と小さいボタンでも自分で外したりはめたり出来るようになる。少しずつ拡げられていく自立が、生活を充実させていく。

「きみは、大工道具を使ったことはなかったろう。今日は使い方を教えてあげよう。釘を打つ時は、こうして打つのだ。鋸をひく時は、こういうふうにやるのだ。でも、しっかり注意して、言われたことを守らないと大変な怪我をする。必ずパパと一緒に使うんだよ」ということで、自分の腕より太い

角材を、汗びっしょりかいて「パパ、切れたよ！」となれば、これまた、一生忘れられない感激として残るかも知れない。

少し位失敗してもいい、自分の力で何とか出来ることを積極的に求めていこうとする心は、線の太い頼母しさとなって現われてくるであろう。このこともまた、他人に頼んで子供の身につけてもらえることではない。毎日の生活の中で、父母が知恵をしぼって色々と考え、子供にやらせているうちにこそ、育っていくものである。しかも、親としても成長していく我が子の手応えが感じられて、こんな楽しいことはない筈である。「今日はこれが出来るようになった。あしたは何をやらせてみようか」と次の日が楽しみになってこよう。

3　手塩にかけて

子供を育てるということは、本来、こうした喜びに満ちた、素晴らしいものである筈なのに、入学試験の準備に気を奪われ、追いたてられ、追い廻されているような、不安定な気持になっているとしたら、こんなに馬鹿げたことはない。この頃では、子育てを、一生の内に数回しか経験しない世の中になってきた。一生の内に、僅か数回しかない、貴重な宝物のような子育ての時期——幼稚園の最後の一年は正にその子育てのゴールデン・アワーともいうべき時期である——を、いらいらしたり、人手にまで渡して過ごしているとしたら、こんなに勿体ないことはない。親としての腕の見せどころなのである。

甚だ当たり前のことであるが、子供は父母が手塩にかけて育てるものである。『両親が、手塩にかけ、心をつくして育てて来た我が子を、受け取らない学校なら、行かなくとも一向に差し支えない』というように主体的に考えられないものであろうか。

4　もっと大事なことがある

「ほら、そんなことをしていたら、試験に受からないわよ」などと、不用意に使われる言葉が、どんなにか子供の豊かな心を、小さな貧しいものにすることであろう。『入学試験などより、もっともっと大切なことが沢山ある』

ということを父母はしっかり自覚している必要がある。

「今月は、お祖母ちゃまのお誕生日が来るから、あなたにビスケットの作り方を教えてあげるわ。お誕生日には、あなたが、はじめから独りで焼いて、お祖母ちゃまのところへ持っていくのよ」ということで、何回か練習をして、当日「お祖母ちゃま、これ僕が生まれて初めて独りで焼いたビスケット、お誕生日おめでとう」と言って贈ることが出来たら、どうであろう。お祖母ちゃまのよろこんだ顔を見て、子供の心はひとまわり大きく成長することであろう。『人にサービスを提供して喜んでもらうことは、自分にとっても掛け替えのない大きな喜びである』ということは、入学試験との関係では余り意味のないことのように考えられ易いが、長い人生を生きていく上で、今の年齢の時に、しっかり身に付けておかねばならない、重要な事柄の一つである。こうしたことが、子供の人生に豊かさを加えていくことであろう。

5　むすび

以上の文章から、幼稚舎が入学試験を実施するに当たって『児童の自然な生活と成長を尊重する』ことをねらいとしている意味を読み取っていただけたであろうか。今更、重ねて言うまでもないが、子供を育てるということは素晴らしいことである。入学試験などという不自然なことに左右されていいような、そんな小さなものではない。「試験、試験」と受験を中心として生活のすべてが回転しているとしたら、コペルニクス的転換が必要である。父母は、大きな夢を抱きつつ、子供の将来を見通す広い視野から、受験ということを考えなければならない。そして、そうした両親の暖かい心と豊かな知性にはぐくまれて育った子供こそ、幼稚舎が入学試験に際して望んでいる子供なのである。

■幼 稚 舎

〒150 東京都渋谷区恵比寿２－35－１

☎ 03－3441－7221㈹

FAX 03－3441－7224

営団地下鉄日比谷線　広尾駅下車
（徒歩 約５分）

都バス　（天現寺橋下車徒歩１分）

都06　渋谷駅 － 新橋駅

橋86　目黒駅 － 日本橋三越前

黒77　目黒駅 － 千駄ケ谷駅

四97　品川車庫 － 四谷駅